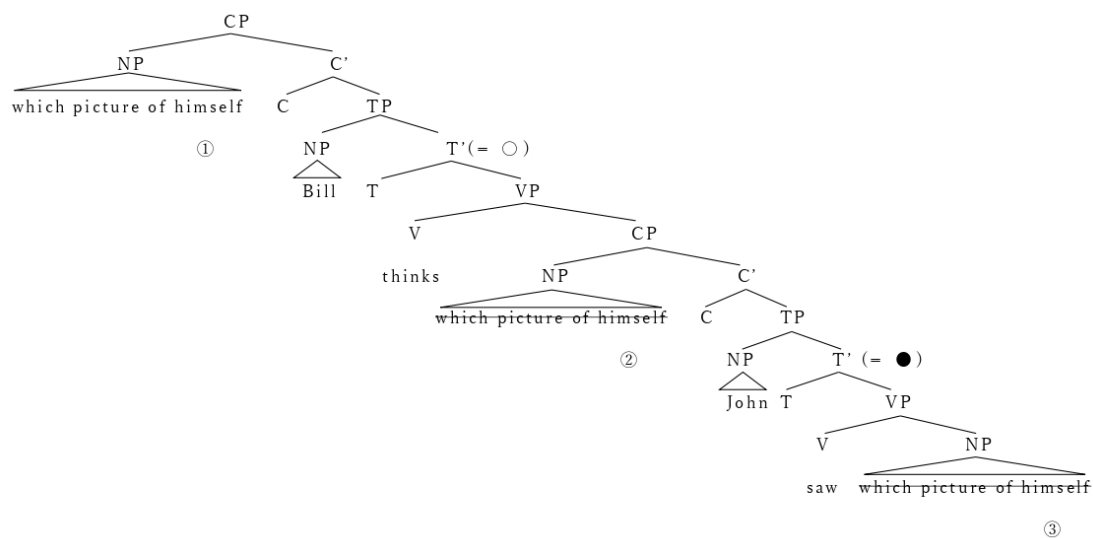


## 第6章 統語現象を考える：統語論2 (瀧田健介・小町将之)

### <基本問題>

1. (9)の構造を樹形図で描き、3か所に現れている himself とその先行詞の間の c 統御関係を確認しなさい (wh 句の内部構造は省略してよい)。

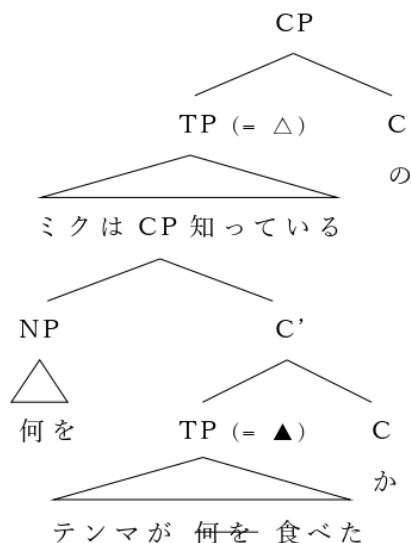
### (解答例)



まず、NP の Bill が c 統御しているのは○で示した主節の T' とそれに支配される節点すべてである。したがって、その T' に支配されている②・③の himself はどちらも Bill によって c 統御されている。次に、NP の John が c 統御しているのは●で示した従属節の T' とそれに支配される節点すべてである。したがって、その T' に支配されている③の himself は John によって c 統御されている。①の himself はどちらの T' にも支配されていないので、Bill にも John にも c 統御されていない。

2. (29)の例について(31)で示したc統御関係を、より詳細な樹形図を描いて確認しなさい。

(解答例)



まず、「の」がc統御しているのは△で示した主節のTPとそれに支配される節点すべてなので、そのTPに支配されている「か」は「の」によってc統御されている。一方、「か」がc統御しているのは▲で示した従属節のTPとそれに支配される節点すべてなので、そのTPに支配されていない「の」は「か」によってc統御されていない。

「何を」については、取り消し線で示した移動前の位置では主節のTPにも従属節のTPにも支配されているため、「か」からも「の」からもc統御されている。一方、移動後の位置では、主節のTPには支配されているため「の」からはc統御されているが、従属節のTPには支配されていないため「か」からはc統御されていない。

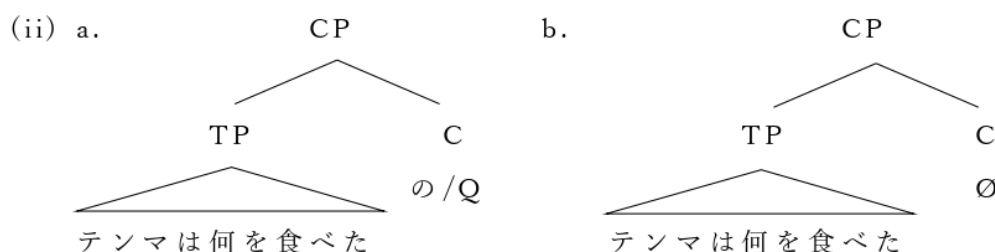
#### <発展問題>

1. 「の/か」がない wh 疑問文を探し、その構造を分析してみなさい。

(解答例) (i)のようなペアを考察してみよう。いずれも「の」はないが、(i-a)は疑問文のイントネーション (“?”で示す)を持っており、(i-b)は平叙文のイントネーション (句点で示す)を持っている。

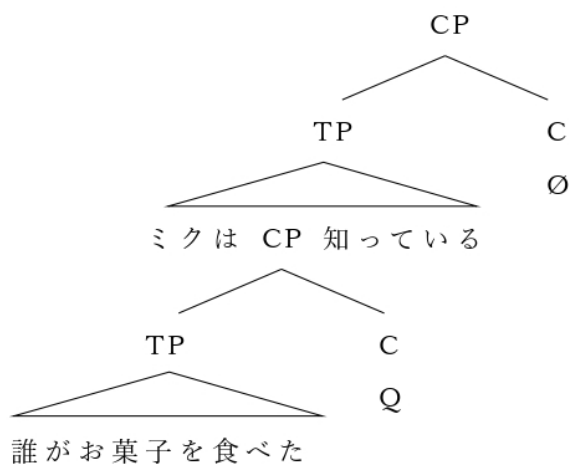
- (i) a. テンマは何を食べた?
- b. \*テンマは何を食べた。

(i-a)は「の」がある場合と同様に wh 疑問文として解釈されるが、(i-b)を wh 疑問文として解釈することはできない。(i-a)には、(ii-a)に示すように「の」の代わりとなる疑問文を表す補文標識 (Q で示す)が存在し、それによって疑問文のイントネーションが表れると分析できる。(i-b)が容認不可能であるのは、Q が統語構造に存在するにもかかわらず疑問文のイントネーションが付与されなかったからと考えられる。このような説明は、統語と音のインターフェイス、あるいは外在化 (コラム2 および終章を参照)の観点からの説明と言える。また、(i-b)の単語列は、(ii-b)のような構造にも対応しうる。しかし、その補文標識として生じている  $\emptyset$  は、平叙文を表す発音されない補文標識 (第5章4節参照)である。(ii-b)には wh 句が結びつくことのできる補文標識が欠けていることになるため、(ii-b)の統語構造では「何を」が wh 句として解釈できない。よって、(i-b)を wh 疑問文として解釈することはできない。



今度は間接疑問文に目を向けて、(iii-a)のような例を考察してみよう。(iii-a)では、wh 句が補文を作用域とする解釈を意図しているため、補文には「か」の代わりに(i-a)と同じ疑問のイントネーションが表れている。(iii-a)が容認不可能なことは、(iii-b)のように Q が補文に生起することは許されないと仮定すると説明できる。

- (iii) a. \*ミクは [誰がお菓子を食べた?] 知っている。  
b.



なぜ Q は補文に生起できないのだろうか。統語と音のインターフェイスの観点では、以下のような分析が考えられる。Q によって引き起こされる疑問文のイントネーションはある一定の音韻的まとまりに付与される(第3章、コラム2および終章2.2.2節参照)。日本語では基本的に補文の右側にそれを選択する動詞が隣接して現れ、補文とともにその音韻的まとまりを形成するため、(iii)の場合、疑問文のイントネーションは補文 CP ではなくそれを選択する動詞を含む CP (ここでは主節 CP)に付与されることになる。ところが、(iii-a)の意図された解釈では補文が wh 疑問文であるため、疑問文のイントネーションが付与される音韻的まとまりと一致しない。つまり、(iii-b)のように Q が補文に生起すると、疑問文のイントネーションが、主節の「知っている」まで及んでしまう。この意味で、統語構造が音に適切に反映されなくなってしまうため、容認不可能となる。

以上のように、(i-a)や(iii)のように wh 句を含むが「の/か」を持たない文を注意深く検討することで、発音されない抽象的な要素(ここでは補文標識としての Q)や、統語と音のインターフェイスについて考察する上で重要なヒントを得ることができる。

2. (35)の一般化を英語の例を用いて検証しなさい。

**(解答例)** 第5章6節および第6章1節で見た通り、英語の通常の wh 疑問文では、wh 句は移動によって疑問の C と結びつき、その作用域を示す必要がある。そのため、(i)の what は NP であるものの、移動せずに元位置にある場合、(i)のような文は(35)の一般化とは独立に排除されてしまう(第5章6節で触れた「問い返し疑問」の場合については後述)。

(i) \*John bought what?/\*Did John buy what?

したがって、(35)の一般化を英語の例を用いて検証するためには、まず英語において元位置の wh 句が許される場合を見つける必要がある。

その一例として、(ii)のように1つの文中に複数の wh 句が生起する多重 wh 疑問文(multiple wh-question)を利用する(多重 wh 疑問文については、Rudin (1988), Richards (2001)等参照)。

(ii) a. Who read what?  
b. What did Miku give to whom?

英語の多重 wh 疑問文では、wh 句が1つ CP 指定部に移動することで作用域が示され、残りの wh 句は元位置に留まる。(ii)では、いずれも下線を引いた wh 句は元位置にあるが、意味的には移動した wh 句とともに解釈される。つまり、たとえば(ii-b)が尋ねている内容は

「ミクが x に y をあげたが、その x と y は何か」というものである。このように、英語の多重 wh 疑問文における元位置の wh 句は、移動せずに疑問の C と結びつくことができる。

一方、(iii-a)のように why は多重 wh 疑問文の元位置 wh 句になれず、(iii-b)のように why を移動しなければならないことが知られている(Huang (1982), Lasnik & Saito (1992)等参照)。また、(iv)のように名詞を含む for what reason は元位置に留まることができる(Reinhart (1998), Stepanov & Tsai (2008)等参照)。

- (iii) a. \*What did John read why?
- b. Why did John read what?
- (iv) What did John read for what reason?

まず、why と for what reason はどちらも理由を問う付加詞であるので、補部と付加詞という観点では(iii)-(iv)に見られるパターンは説明できない。では、(35)の一般化に従い、名詞を含む wh 句は移動せずに疑問の C と結びつくことができるが、名詞を含まない why は移動によってしか疑問の C と結びつくことができないと考えるとどうだろうか。(iii-a)では what が CP 指定部に移動しているため、why には顕在的な移動によっても非顕在的な移動によっても C と結びつくすべはない。他方(iii-b)では、why が顕在的な移動によって C と結びつき、what は移動せずに C と結びつくことができる。(iv)では(iii-a)と同様に what が CP 指定部に移動しているが、for what reason は名詞を含むため移動せずに C と結びつくことができる。したがって、(iii-a)が容認不可能であり、(iii-b)と(iv)が容認可能であることが説明できる。このことは、補部と付加詞の相違に基づく説明よりも、(35)の一般化に基づく説明のほうが妥当であることを示している。

島を含む例についても考察を広げてみよう。(v-a)は、関係節内から what が移動したことによって付加詞条件に違反している例である(第6章(13a)を再掲)。(v-a)の主節主語を wh 句に変えた(v-b)は文として容認可能であり、what は移動せず関係節内の元位置にあるが、(ii)のような島を含まない多重 wh 疑問文の場合と同様に who とともに主節で解釈される。what 自体が NP であるため、この観察は(35)の一般化に合致している。

- (v) a. \*What did Mary visit [the city [where John bought \_\_\_\_]]?
- b. Who visited [the city [where John bought what]]?

これに対して、元位置の wh 句が why の場合には、(vi-a)のように容認不可能となる。これは、(35)の一般化からすると、名詞を含まない why は(iii-a)と同様に疑問の C と結びつくためには移動が必要となるからである。さらに、(iv)や(v-b)と同様に、(vi-b)では名詞を含む for what reason が移動せずに疑問の C と結びつくことができるため、容認可能な文となる。

- (vi) a. \*Who visited [the city [where John had lived why]]?  
b. Who visited [the city [where John had lived for what reason]]?

したがって、(v)-(vi)のデータからも、補部と付加詞の相違に基づく分析よりも(35)の一般化に基づく分析のほうが優れていると言える。

さらに発展的な内容に関心がある読者は、問い返し疑問を使って多重 wh 疑問文の場合と同じ議論ができるか考えてみよう（問い返し疑問については、たとえば Bolinger (1978), Sobin (1990, 2010)等を参照）。また、why や「なぜ」といった理由を問う wh 句の不思議な振る舞いについては、上であげた論文以外にも、Fukui (1988), Collins (1991), Bromberger (1992), Saito (1994), Tsai (1999), Rizzi (2001), Ko (2005, 2006), Shlonsky & Soare (2011), Takita & Yang (2014), Soare (ed.) (2021)等を見てみるとよい。

#### <参考文献>

- Bolinger, D. (1978) "Asking More Than One Thing at a Time," *Questions*, ed. by H. Hiz, 107-150, D. Reidel.
- Bromberger, S. (1992) *On What We Know We Don't Know: Explanation, Theory, Linguistics, and How Questions Shape Them*, The University of Chicago Press.
- Collins, C. (1991) "Why and How Come," *More Papers on Wh-Movement (MITWPL 15)*, ed. by L. Cheng and H. Demirdache, 31-45, MITWPL.
- Fukui, N. (1988) "LF Extraction of *Naze*: Some Theoretical Implications," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 503-526.
- Ko, H. (2005) "Syntax of Why-in-Situ: Merge into [Spec,CP] in the Overt Syntax," *Natural Language and Linguistic Theory* 23, 867-916.
- Ko, H. (2006) "On the Structural Height of Reason Wh-Adverbials: Acquisition and Consequences," *Wh-Movement: Moving On*, ed. by L. Cheng and N. Corver, 319-349, MIT Press.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move  $\alpha$* , MIT Press.
- Reinhart, T. (1998) "Wh-in-Situ in the Framework of the Minimalist Program," *Natural Language Semantics* 6, 29-56.
- Richards, N. (2001) *Movement in Language: Interactions and Architecture*, OUP.
- Rizzi, L. (2001) "On the Position "Int(errogative)" in the Left Periphery of the Clause," *Current Studies in Italian Syntax: Essays Offered to Lorenzo Renzi*, ed. by G. Cinque and G. Salvi, 267-296, Elsevier.
- Rudin, C. (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH Fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.

- Saito, M. (1994) "Additional-Wh Effects and the Adjunction Site Theory," *Journal of East Asian Linguistics* 3, 195-240.
- Shlonsky, U. and G. Soare (2011) "Where's 'Why'?", *Linguistic Inquiry* 42, 651-669.
- Soare, G. (ed.) (2021) *Why is 'Why' Unique?: Its Syntactic and Semantic Properties*, De Gruyter Mouton.
- Sobin, N. (1990) "On the Syntax of English Echo Questions," *Lingua* 81, 141-167.
- Sobin, N. (2010) "Echo Questions in the Minimalist Program," *Linguistic Inquiry* 41, 131-148.
- Stepanov, A. and W.-T. D. Tsai (2008) "Cartography and Licensing of Wh-Adjuncts: A Cross-Linguistic Perspective," *Natural Language and Linguistic Theory* 26, 589-638.
- Takita, K. and B. C.-Y. Yang (2014) "On Multiple Wh-Questions with 'Why' in Japanese and Chinese," *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, ed. by M. Saito, 206-227, OUP.
- Tsai, W.-T. D. (1999) "On Lexical Courtesy," *Journal of East Asian Linguistics* 8, 39-73.